

Contents

- 1 大学博物館等協議会第20回大会・第12回日本博物科学会開催報告
山形大学附属博物館 学芸研究員 佐藤 琴
- 3 資料をめぐる国立歴史民俗博物館のミッションについて
国立歴史民俗博物館メタ資料科学研究センター
- 5 静岡大学キャンパスミュージアム2017年度企画展「The 標本学！」
キャンパスミュージアム 館長 塚越 哲
- 6 「記憶の劇場」—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座
大阪大学総合学術博物館 特任研究員 山崎 達哉
- 8 愛媛大学ミュージアム共催研究会
「誰もが参加できるミュージアムを目指して—高齢者・障がい者を中心に—」
愛媛大学ミュージアム 准教授 吉田 広
- 9 「島根大学総合博物館」がオープン！
島根大学総合博物館 入月 俊明・会下 和宏

大学博物館等協議会第20回大会・ 第12回日本博物科学会開催報告

山形大学附属博物館
学芸研究員 佐藤 琴

大学博物館等協議会の第20回大会および第12回日本博物科学会は山形大学小白川キャンパスで開催された。

大会は附属博物館が一階に位置する人文社会科学部1号館301教室、博物科学会は耐震改修工事が終了しイベントエリアとなった小白川図書館1階を会場とした。参加人数は97名（会員館24、非会員大学1）であった。6月22日午後1時から大会実行委員会委員長の新宮学および小山清人山形大学長の歓迎の挨拶で幕を開けた。引き続き、大学博物館等協議会シンポジウム「大学収蔵資料の可能性を引き出す」を行った。

このシンポジウムのテーマは、大学博物館等協議会が設立されて20年目の節目を迎えるにあたり、大学博物館の設置が促進されるきっかけとなった、学術審議会学術情報資料分科会の「ユニバーシティ・ミュージアムの設置

について（報告）」（1996年）をあらためて見直すべく企画したものである。特に、本報告において大学博物館が収集保存し、活用するものとして「学術標本」があげられ、それらは「学術研究の目的で収集あるいは生成されたもの」と定義されていた。しかし、現在の大学博物館が収集する資料はその範囲にとどまるものではない。まず、山形大学と九州大学における教材および備品を博物館資料として評価し、保存・活用した事例をご報告いただき、議論の契機とした。

まず、山形大学の事例として、三上喜孝氏（国立歴史民俗博物館、2013年まで山形大学在職）が「大学収蔵資料の調査研究と社会的活用—2つの石碑拓本の実践例から—」と題して報告した。山形大学小白川図書館の書庫から2つの石碑拓本の発見した経緯と拓本を起点とした研究の広がり、そして教育への活用に至るまでの幅広い可能性について言及した。三島美佐子氏（九州大学総合研究博物館）は、九州大学の箱崎キャンパス移転（2005～19年）の過程における廃棄予定物品（校章入り食器類などの備品）のレスキューを実施し

てきた。その経緯と現状、保管および活用に関して報告した。

その後、岡橋秀典氏（前広島大学総合博物館長）と佐藤の司会でディスカッションを行った。山大・九大の事例からわかるとおり、現在の大学博物館が収集の対象とするものは20年前の報告が想定していたものをはるかに越えている。それにともない、什器などの大型物品の保存方法など、新たな課題も生じている。そのうえ、三上氏も三島氏も、報告した資料は自身の専門領域から外れており、限りある自身のリソースをどこまで費やすのか、という点も話題となった。無論、それらの資料を専門とする学外の研究者との共同研究を実施しているが、それで労力が軽減するわけでもない。加えて、ディスカッションの間では京都大学から、大学教員の研究資料（調査メモなど）も大学博物館が収集の対象にすべきであり、取り組みを始めているとの紹介があった。

大学博物館が対象とすべき資料は拡大し続けている。それは新たな研究の可能性を生み出し続けており、大学博物館もフォローし続けていくべきだろう。しかし、限りある予算やスペース、人員でどのように取り組むべきかという、大きな課題を共有してシンポジウムは閉幕した。

その後、館長会議を実施した。この時点で2019年度大会の開催校が決定していなかったことが事務局側の不安材料であった。しかし、秋田大学が名乗りをあげてくださり、満場一致で翌々年度の開催校が決定した。

その間、他の参加者の方々には、小白川図書館1階イベントスペースにおいてポスター発表および三上氏が報告した小白川図書館所蔵の「広開土王碑拓本」および「物部守屋大連之碑拓本」を見学していただいた。

続いての総会においては、予算・決算の記載方法などで議論が紛糾し、終了予定時刻を1時間以上超過してしまった。しかも、懇親会会場は終了時刻を延長できないとのことで、

懇親会は1時間しか時間がとれなかった。それでも、開会挨拶で小山学長がぜひ楽しんでほしいと述べた、選りすぐりの山形の地酒とワインと山形の郷土料理はほとんど消化していただき、事務局側としては安堵した。山形大学花笠サークル「四面楚歌」の若々しい演舞も懇親会に花を添えた。会長校を退く大阪大学および次の会場校である香川大学のご挨拶を頂戴して懇親会は閉会した。

翌日の博物科学会では小白川図書館1階において12題の口頭発表を行った。＜教育＞＜研究＞＜展示＞＜地域と社会連携＞。いずれのテーマも各大学が博物館活動に対する積極的な取り組みがしのばれるものであり、発表後には活発な討議が行われた。

発表終了後は「山形城跡発掘調査現場（霞城公園）」を実施した。本学の敷地内にも歴史の痕跡や豊富な自然はあるが、霞城公園とその近辺には山形県立博物館をはじめとする博物館が複数存在しているうえに、山形城の発掘調査には当館の学芸研究員が学術協力を行っている。その実例を現地で体感していただきたかったからである。希望者はバスで移動し、現地では齋藤仁氏（山形市教育委員会社会教育青少年課文化財係）から遺跡に関する説明を受けた。前日の曇天とはうってかわって晴天となり、絶好の遺跡見学日和となった。本大会で予定していたプログラムは以上である。

天候と参加者の皆様にめぐまれ、小白川図書館の全面的なバックアップをうけて当番校の重責を何とか果たすことができた。本大会において確認するまでもなく、20年前の「ユニバーシティ・ミュージアムについて（報告）」が出された時点には予想もつかなかったほど、現在の大学博物館は厳しい状況に直面している。その一方で、大学博物館の意義と可能性もより大きくなってきたとはいえるのではないか。これからの20年に向けて、共に進む仲間との絆を再確認した2日間であった。



シンポジウム「大学収蔵資料の可能性を引き出す」



博物科学会 ポスター発表



シンポジウム関連展示「広開土王碑拓本」



懇親会にて学生サークルによる花笠踊り



博物科学会 口頭発表



遺跡見学 山形城跡発掘調査現場

資料をめぐる国立歴史民俗博物館のミッションについて

国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市、以下歴博）では、平成28年度から平成33年度までの歴博における基幹ミッションとして、共同研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を実施しています。

この共同研究では、様々な歴史資料のデー

タを作り、ネットワーク化し、活用するためのユニット（人文情報ユニット）、ひとつの歴史資料に対して複数の分野から分析し、新たな視点から歴史資料を見ることを目指すユニット（異分野連携ユニット）、それらの成果を大学の教育や地域の歴史文化へと還元していくユニット（地域連携・教育ユニット）の3つに分かれて研究を進めています。これらの研究を、館内にある「メタ資料学研究センター」というセンターを中心に取りまとめています。歴史資料の利用から、その研究プロ

セス、最終的な成果の活用までの一連の流れについて、多くの大学や博物館と連携しながら、資料学の新たなモデル構築を目指すことが、本研究の狙いです。

人文情報ユニットでは、性質の異なる資料を同時に入れられ、それをリンクで見ることができるようなシステムを開発すると同時に、画像と目録について他機関のものも合わせてシームレスに相互に閲覧可能なシステムの構築を行っています(※)。このシステムにより、複数の他機関の資料を芋づる式に探すことができるとともに、各機関での目録の項目が異なっているにもかかわらず、それを意識せずにデータを見つけたりすることができるようになります。これにより、分野を超え、機関や地域、国境をも超えた資料の研究利用の体制を整えることができるようになると思っています。今後はデータをより広く充実させていくとともに、歴史資料全体の基盤となるようなデータ・システムの整備へと着手し、様々な応用事例の開発などを試みる予定です。

異分野連携ユニットでは、現在、大きく2つのテーマについて取り組んでいます。ひとつは、文字資料を中心とした紙の総合的な分析です。これまで、前近代の紙資料についての研究は、繊維の分析を中心に行われていました。本ユニットでは、自然科学・文化財科学の知見を活かしつつ、そこからさらに踏み込んで、紙の中にある「混ざりもの」を総合的に見ていく試みを行っています。例えば、紙の中に入っている米の粉などのデンプン进行分析することで、紙の製法と利用方法との関

係を探り、当時の文書のありようや理解について、異なる視点から解明することができるのではないかと考えています。もうひとつは、「聆涛閣集古帖」という、近世の終わりごろに、当時から見た様々な過去の資料を記述した資料の研究です。これは、他の「聆涛閣集古帖」についての研究を進めている共同研究とともに実施していますが、総合資料学では、特にデータの連携による「集古帖」内の記述と外部の資料とのリンクの可能性などを探っています。このように、異分野連携ユニットでは、他の共同研究と連携して事業を実施することで、積極的に異なる分野の研究者との議論の場を作るとともに、新たな資料情報のデータ化などを実施しています。

地域連携・教育ユニットでは、大学の様々な事業と深く連携した教育展開などの検討を進めています。例えば千葉大学とともに歴博の博物館機能を利用したアクティブラーニング形式の授業を実施するなど、研究成果を広く教育等に還元しています。また、人間文化研究機構で2017年度から準備研究が行われている歴史文化資料保全ネットワークの構築プロジェクトと密接に連携を取り、大学が調査・情報収集した歴史資料のデータ記録化やバックアップなどを通じて、地域の歴史文化資料保全への貢献を行っていく予定です。

総合資料学の共同研究では、最初に述べましたように研究の入口から出口までをトータルに分析しています。それに加え、研究成果そのものを再度共同利用可能にする(情報収集の対象にする)ことも視野に入れています。



第28回日本資料専門家欧州協会年次大会(EAJRS 2017)でのブース展示の様相



若手研究者・大学院生を主たる対象とした正倉院文書のワークショップ

この研究の「入口→プロセス→出口→入口→…」という全体の循環そのものを可視化することで、人文学研究全体がもつ意義などを、再度見直すことができるのではないかと考えています。本共同研究を通じて、大学博物館等を含む大学や博物館と連携しながら、これらの最終的な目的に少しでも近づく所存です。

(※) システム構築にかかる直近の動きとしま

静岡大学キャンパスミュージアム 2017 年度企画展「The 標本学！」

キャンパスミュージアム 館長 塚越 哲

静岡大学キャンパスミュージアムでは、「The 標本学！」と題して、2017 年 11 月 13 日より 12 月 21 日まで企画展が開催された。大学祭期間中の 11 月 18 日と 19 日には、標本作成の体験イベントも併せて開催された。

本企画展の趣旨は、博物館の中心を形成するモノである標本について、その学問的役割やヒトの科学的思考とのつながりを示すことを趣旨とした。展示序文にも書いたことであるが、標本とは大きく 2 つの役割がある。一つは学問的リファレンス、学問の再現性の保証であり、また別の観点では、自然界全体を類推する思考の礎である。本企画展では、このような標本の役割が理解されるよう、また標本が本学の研究・教育に大きな役割を果たしていることが表現できるよう努めた。

展示室入り口には「序文」として本企画展の趣旨を掲載し、展示室中央にはタイプ標本を置き、時計回りに順路を作って、石器・須恵器、古生代三葉虫化石、新生代貝類化石、現生貝類とその捕食痕、微小動物（クマムシ、貝形虫）の順にコーナーを設けた。また大型スクリーンには展示に関連する写真を解説付きで常時スライド上映して情報を補った。

タイプ標本としては、スウェーデン自然史博物館から借用した三葉虫 *Pompeckia minor* Warburg, 1925（標本番号 RM Ar11426）と、本キャンパスミュージアム所蔵の貝形虫 *Cytherois ikayai* Nakao & Tsukagoshi, 2002（標本番号 SUM-CO-1196）の 2 標本を、タイプ標本の意義の解説とともに展示した。

して、平成 30 年 5 月に第一次のネットワークシステムを公開しました (<https://khirin-id.rekihaku.ac.jp/>)。まずは館蔵資料の一部と歴史民俗調査カードという文化財情報、千葉大学との連携した古文書情報について掲載しています。今後、広く多様な資料を追加してまいりますので、大学博物館等の皆様に連携可能な情報がありましたら、ぜひご連絡をお願いいたします。

石器・須恵器コーナーでは、新潟県真人原遺跡から発掘された黒曜石製の石器、古墳時代の須恵器が展示され、考古学の立場から見た標本の意義や、展示資料の考古学的解説がなされた。古生代三葉虫化石コーナーでは、スウェーデン産の三葉虫標本と三葉虫が作った這い痕（生痕）標本とともに、化石研究者から見た標本のとらえ方が解説された。新生代貝類化石コーナーでは、静岡県掛川層群産化石が化石を取り出す前の母岩とともに展示され、採集された化石が深海生物群集であることや、堆積当時の深海生物の多様性研究につながることも併せて解説された。

現生貝類とその捕食痕コーナーでは、1000 個近い標本を陳列して貝類同士の捕食・被食関係や日本と近隣海域のハマグリの状態、分布、遺伝子の比較など、今進んでいる研究に密接に関連して解説された。微小動物コーナーでは、個々の生物の特性を解説するとともに、生きたクマムシが活動する様子を実体顕微鏡で観察したり、貝形虫類のステレオ写真を観賞したりする展示がなされた。

大学祭期間中の 11 月 18 日と 19 日に、標本作成の体験イベントが併せて開催されたこと



手前が新生代貝類コーナー、中央が現生貝類とその捕食痕コーナー、奥が生きたクマムシの観察展示コーナー。

は、本企画展の特色となった。標本作成体験企画は二つあり、一つはメダカの骨格標本作製するものであり、もう一つは三葉虫のレプリカ標本作製するものである。この体験企画には親子連れの参加者が間断なく訪れて大変な賑わいとなり、自ら作成した標本を記念として持ち帰っていった。展示だけでは子供連れで入りにくい雰囲気を使い意味で壊すことができたと思う。このような取り組みが、大学博物館と市民社会との敷居を低くすることが実証されたともいえる。

静岡キャンパスは市街地から離れており、大学博物館は必ずしも広く認知されているとは言えない中で、本企画展では650名の来館者を迎えることができた。アンケートには84件の回答があった。内訳をみると、性別では男女がほぼ同等、年齢では20代が目立って多かった。職業としては社会人、次いで小学生を含む学生、居住地は静岡市内が半数近くを

占めた。自由記入欄でも様々な意見が書き込まれ、おおむね良好な意見で占められた。特に生きたクマムシと貝の捕食痕の展示は多くの来館者の関心を引いたようである。

本企画展には、理学、教育、人文社会の各学部、そして技術部からと、静岡キャンパスから広く協賛者を得ることができ、キャンパスミュージアムらしい展示となったが、昨年(「第五福竜丸と静岡大学」)のようにマスコミがこの企画の取材に訪れることがなかったのは残念である。しかし結果的には来館者数は昨年を上回り、学生をはじめ、若い世代の来館が非常に多かったことは、昨年とは違った収穫であった。昨年のような社会性を持った展示とは正反対の今回のような企画をキャンパスミュージアムで試すことは意義があった。

来期は人文・考古系の企画展が予定されている。



手前中央が石器須恵器コーナー、左が古生代三葉虫化石コーナー、右が新生代貝類コーナー。



メダカの透明骨格標本作成の体験イベント。

「記憶の劇場」—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座

大阪大学総合学術博物館 特任研究員 山崎 達哉

大阪大学総合学術博物館では、平成28年度「記憶の劇場」—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座」を、平成29年度「記憶の劇場Ⅱ」—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成プログラム」を開催してきた。これは、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、大阪大学総合学術博物館が主催し、大阪大学文学研究科と共催で推進する3年間のアートマネジメント人材育成講座である。また、近隣のあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックス

ホール、大阪新美術館建設準備室、吹田市文化会館メイシアター、豊中市都市活力部文化芸術課、能勢浄るりシアター、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター、益富地学会館などの芸術諸機関の協力を得ている。

大阪大学総合学術博物館と文学研究科の教員が本事業における講座を担当した。それぞれの教員は、美術、音楽、演劇、パフォーマンスなどの多様な芸術分野や自然科学も取り扱い、専門性を活かした講座を展開し、展示会の企画運営をも教授した。本事業では、文化芸術関連機関で勤務している、あるいは勤務を希望する社会人や、文化芸術を通じて自らイベントを開催するなどして地域社会に貢献をしたい、あるいは既に企画開催している

社会人・学生を受講生として迎えた。平成 28 年度には 55 名、平成 29 年度には 46 名の受講生があり、常に約 7 割近い受講生が修了し、アートマネジメント人材の育成を達成できている。

本事業には、①博物館の〈ミュージアム・ピース〉を〈生きたアート〉として公開する、②地域社会との協奏による芸術実践の試みと基礎研究を連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方の探求、③文系理系を横断しつつ多様な文化芸術領域に柔軟に対応できる“ジェネラリスト”人材の育成、の 3 大理念がある。この理念のもと、アートマネジメント人材育成だけでなく、地域社会の文化的な活性化や大学博物館のアウトリーチ活動としての新しいモデル提示を目指している。

受講生には、この理念を共有しつつ多様な芸術領域に柔軟に対応できるようプログラムを用意した。さらに、新しいイベント等を創設できるよう、実務面だけでなくコンセプトや内容も企画運営に関与できるプログラムを設置し、1 年を 3 期にわけた。

第 1 期は全体的な理念、学知を学ぶ座学中心の学習期間とした。

第 2 期は具体的な研修を行う期間とし、受講生は以下の 6 つの講座にわかれて受講した。

橋爪節也担当の「地域文化の研究による発信・顕彰とメディアリテラシー」では「エコ・ミュージアム」の考えからクルージング調査で大阪の川や橋に着目した。受講生が小冊子を作成し、水都大阪の魅力を再発見した。



記憶の劇場Ⅱ ポスター

自然科学が専門の上田貴洋、伊藤謙が担当する「自然科学に親しむ・触る・アートする」では、マチカネワニの化石をアートに昇華する方法や、鉱物の図鑑を作成する方法を学んだ。

作曲家・三輪眞弘のオペラ作品『新しい時代』に着目した伊東信宏は「オペラ『新しい時代』をめぐるワークショップ」・「三輪眞弘『新しい時代』の再演」において、コンサートやオペラの再演を企画、制作した。公演をザ・フェニックスホールにおいて行い、成功を収めた。

演劇学の永田靖、横田洋が推進する「パフォーミング・ミュージアム」では、本学博物館に寄託されている資料を活用し、初年度の Vol.1 では森本薫を、翌年の Vol.2 ではくるみ座を扱った。その成果は劇団このしたやみの山口浩章演出による演劇作品の創作に結実し、いずれの公演も盛会となった。

山崎達哉は、時間的に遠い過去から伝わる豊富な知やわざについて受講生とともに考える講座を開催した。「紛争・災害の TELESOPHIA」では震災の復興における文化的活動に、「旅・芸の TELESOPHIA」では人形の芸と旅（移動）



展覧会『記憶の劇場Ⅱ』エントランス



オープニング・セミナー

と劇場の関係について迫った。

パフォーマンス作品の記録と活用について考察する、古後奈緒子担当の「ドキュメンテーション／アーカイヴ」では、受講生の手による維新派の記録作成や台本出版の実践、『在日バイタルチェック』や『滲むライフ』など記録できない調査や上演作品のドキュメンテーションと考察を進めた。

第3期には、第2期の成果を中心に受講生の企画運営による展覧会を開催した。展覧会には一般からも多数の入場者があり、大学博物館の新しい活用方法を提示し、大阪や関西の芸術文化の活性化につながった。

本事業によって、様々な地域における芸術

諸機関と協力し、大学内だけでなく、学外においても博物館の諸活動を広げることができた。また、多数の社会人受講生をアート・ファシリテーター人材として育成できたことは最大の成果と言える。本事業は平成30年度も「記憶の劇場Ⅲ」—大学博物館における文化芸術ファシリテーター育成プログラム—として継続して採択され、3年目を迎えている。大学博物館による様々なアウトリーチ活動によって、文化芸術の活性化が求められる地域社会へ、展覧会やアート・イベント等を創出できる人材を輩出できたことは、大学博物館の新しい機能を築いたといえるであろう。

愛媛大学ミュージアム共催研究会 「誰もが参加できるミュージアムを目指して—高齢者・障がい者を中心に—」

愛媛大学ミュージアム 准教授 吉田 広

2018年3月4日（日）・5日（月）に、愛媛大学を会場に、四国ミュージアム研究会愛媛大会が開催され、愛媛大学ミュージアムも、これに共催という形で参加した。テーマは「誰もが参加できるミュージアムを目指して—高齢者・障がい者を中心に—」である。2016年4月に障害者差別解消法が施行され、大学はじめ公立の博物館・美術館でも障がいをもつ人及び特別な配慮・調整が必要な人への対応をはかってきたこと、そして2017年度に、愛媛県内で国体・全国障害者スポーツ大会が開催され、一層そういった対応に各館が実績を積んできたこともあって、このテーマが選ばれた。

四国ミュージアム研究会は、さまざまなジャンルを超え、四国に立地するミュージアム関係有志が2005年に結成し、4県輪番で毎年研究会を開いてきた。その活動成果の一端は、以下のような書籍の発行ともなっている。
四国ミュージアム研究会編 2007『博物館が好きっ！—学芸員が伝えたいこと—』、教育出版センター

四国ミュージアム研究会編 2016『もっと博物館が好き！—みんなと歩む学芸員—』、教育出版センター

愛媛県博物館協議会ははじめ、県内博物館・

美術館関係者との日常的な交流の中で、愛媛大学ミュージアム教員や学生スタッフが同研究会にこれまでも参加してきたことがあり、2017年度愛媛県開催にあたって、愛媛大学ミュージアム共催で愛媛大学を会場にとの運びとなったところである。

研究会は、日・月と博物館関係者ならではの曜日設定で、愛媛大学総合情報メディアセンターメディアホールを会場に、1日目は高田氏の基調講演と事例報告4本、そして梅田氏からの特別報告1本が行われた。

高田浩二（福山大学）

「発達障がい児の療育を目指した博物館（水族館）学習の実践」

森芳功（徳島県立近代美術館）

「徳島県立近代美術館のユニバーサル・ミュージアム事業について」

大本敬久（愛媛県歴史文化博物館）

「地域回想法と博物館—記憶と物語の継承・



事例報告（パソコンノートテイク投影）

構築—」

窪美西嘉子（香川県立東山魁夷せとうち美術館）

「みんなで美術を味わう—対話型鑑賞の取り組みから—」

松本志帆子（特定非営利活動法人ワークスмираい高知 藁工ミュージアム）

「藁工ミュージアムの取り組みについて」

梅田亜由美（エデュケーター）

「「ために」から「ともに」へ—「みんなの美術館プロジェクト」から10年」

1日目夜には懇親会が開かれ、そこでの議論も盛り上がり、2日目はそれも受けて、愛媛県教育委員会の土居聡朋氏をコーディネーターに、講演者・報告者をパネリストにディスカッションが行われた。そして、最後に愛媛大学ミュージアムの見学が行われた。

あくまで、四国ミュージアム研究会主催の研究会であったものの、大学内で開催し、愛媛大学ミュージアムが共催した意味は小さくなかった。大学自体が、障害者差別解消法施行に伴う「合理的配慮」の実績を重ねており、とくに共催に伴って、学内の対応相談窓口であったバリアフリー推進室に準備段階から協力を仰ぐことができた。そもそも、博物館関係者・健常者の参加を想定していたところ、障がいのある方々からの問い合わせ

も告知後すぐに寄せられ、バリアフリー推進室からの助言も得て、改めて案内を作成し直した。「第14回四国ミュージアム研究会に参加される障がいのある方及び合理的配慮の提供が必要な方へ」とした追加案内では、会場までのアクセス・車いすの方の来場・補助犬トイレ・情報保障について明記し、最後に「なお、この研究会は学芸員有志の集まりであるため、運営資金が潤沢ではございません。ご希望に沿った情報保障ができない可能性があります。私たちの今後の課題として捉えていただき、どうかご理解をいただけますと幸いです。」と結んだ。

当日の聴覚障がいのある方への対応では、1日目は、大学授業で提供しているパソコンノートテイクを手配し、逐語的な口述筆記を投影し、懇親会と2日目シンポジウムと見学会では、手話通訳者を配置した。これら対応をスムーズに行えたのも、学内で日常的な対応を行ってきたバリアフリー推進室の存在抜きには語れない。

そして、こういった一連の経験は、教員だけでなく学生スタッフも含め、誰にも開かれたミュージアムを目指したとき、社会的弱者の視点で、どのような対応を「ともに」行っていくべきか、その視点を新たにしてくれた、有意義な機会であった。



ディスカッション（手話通訳）



ミュージアム見学会（手話通訳）

「島根大学総合博物館」がオープン！

島根大学総合博物館 入月 俊明・会下 和宏

島根大学ミュージアムは、それまでキャンパス内にあった既存の展示スペースをネットワーク化して利活用をはかっていくというコンセプトで平成18年度に発足し、これまで12

年間にわたって様々な博物館活動を行ってきた。しかし、狭隘な展示施設がキャンパス内に個別分散していることから、大人数の団体見学や飛び込み見学の受け入れに支障をきたすなど、様々な課題を抱えていた。

こうした長年の懸案を解消するために、大学執行部の英断によって、学内にある空き教

室を改修し、平成 30 年 6 月、新しい一元的な博物館施設「島根大学総合博物館」がオープンする運びとなった。本原稿執筆時の現在、教室の改修工事を終えて、展示ケースや資料の移転作業を進めているところである。

さて、島根大学は、明治 8 年に設置され、小泉八雲も英語教師として赴任していた師範学校、山陰で唯一の旧制高校である松江高等学校などが母体となって設立された、歴史ある総合大学である。キャンパスがある島根県は、日本海・離島・島根半島・宍道湖・中海・中国山地など豊かで多様性のある自然環境を有し、先史時代からの人類活動によって個性的な文化が育まれてきた。こうしたフィールドを舞台にした長年の教育研究のなかで、本学には数多くの標本資料類が残されてきた。例えば、師範学校から受け継がれた、絶滅したオキウマやニホンアシカといった 19 世紀の標本、旧制松江高校時代の様々な動物標本・骨格標本、新制島根大学が収集した島根県内の岩石・鉱物・化石・昆虫・考古資料など、貴重かつ多様な学術資料が所蔵されている。

新しくオープンする総合博物館展示室では、総合大学である本学が有するこうした様々な学問分野の資料を総合展示していく予定である。当初の展示大テーマは、以下のように計画している。

I. 島根大学のこれまでとこれから 島根大学の学校史や教育研究を展示。

II. 日本海と島根の自然史 日本海や島根

県の岩石・化石・動植物などを展示。

III. 古代出雲の世界 先史・古代を中心とした山陰地域の考古資料を展示。

IV. 島根の歴史と文化 島根県の絵図や文書、民俗資料などを展示。

もとより以上の展示は、学問分野の枠にとらわれることなく、多様な資料を活かした学際的な構成にしていきたいと考えている。

ところで、島根県は隠岐ユネスコ世界ジオパークおよび島根半島・宍道湖中海ジオパークという 2 つのジオパークを有している。島根大学総合博物館では、新しく開設された島根半島・宍道湖中海ジオパークのビジターセンターに化石標本などの所蔵資料を貸し出すなどして、展示協力を行っているところである。加えて、当館展示室においても大地（ジオ）－生態系（エコ）－人（ヒト）という 3 つの要素のつながりを楽しく学ぶことができるジオパーク的な総合展示を行うことで、県内ジオパーク活動の一翼を担っていきたいと考えている。

なお現在、島根大学総合博物館では、文系・理系 3 学部の学生向けに学芸員養成課程の授業を開講している。こうした授業のほか、一般教養課程・専門課程の授業においても、新しい博物館を活用して、実践的な学生教育を進めていきたい。

発足から苦節 12 年を経て、ようやく大学博物館の舞台が整い、活動のスタートラインに立つことができた。ここから島根大学の学術情報を学内や地域、そして世界に発信し、本学や島根県の一層の飛躍に寄与していきたい。先行する他大学博物館の皆様のご教示、ご指導を乞う次第である。



現存する唯一のオキウマ標本（1888 年製作）



島根半島で捕獲されたニホンアシカ（1886 年製作）

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

東京藝術大学大学美術館

東西美人画の名作《序の舞》への系譜

2018年3月31日(土)～5月6日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

NHK大河ドラマ特別展「西郷どん」

2018年5月26日(土)～7月16日(月・祝)
東京藝術大学大学美術館本館

藝大コレクション展

2018年10月2日(火)～11月11日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部須永剛司教授退任展(仮称)

2018年10月4日(木)～10月9日(火)
東京藝術大学大学美術館陳列館

退任記念 深井隆展 — 7つの物語 —

2018年11月1日(木)～11月11日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

2074、夢の世界(仮称)

2018年11月14日(水)～12月2日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

2018年12月11日(火)～12月20日(木)(仮)
東京藝術大学大学美術館本館

大学院美術研究科木島隆康教授退任展(仮称)

2019年1月4日(金)～1月18日(金)
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部本郷寛教授退任展(仮称)

2019年1月4日(金)～1月21日(月)
東京藝術大学大学美術館本館

美術学部トム ヘネガン教授退任展(仮称)

2019年1月4日(金)～1月21日(月)
東京藝術大学大学美術館陳列館

美術学部北川原温教授退任展(仮称)

2019年1月4日(金)～1月21日(月)
東京藝術大学大学美術館陳列館

東京藝術大学卒業・修了作品展

2019年1月28日(月)～2月3日(日)
東京藝術大学大学美術館本館、
東京藝術大学構内、東京都美術館

※事情により展覧会名称、会期等が変更になる場合があります。

国立歴史民俗博物館

お化け暦と略縁起——くらしのなかの文字文化——

2018年4月24日(火)～10月28日(日)
第4展示室

ニッポンおみやげ博物誌

2018年7月10日(火)～9月17日(月・祝)
企画展示室

日本の中世文書——機能と形と国際比較——

2018年10月16日(火)～12月9日(日)
企画展示室

紀州徳川家の楽器——琵琶 II——

2018年10月30日(火)～12月9日(日)
第3展示室

変わりゆく結婚式と近代化

2018年12月11日(火)～2019年5月12日(日)
第4展示室

吉祥のかたち

2019年1月5日(土)～2019年2月11日(月・祝)
第3展示室

総合展示第1展示室「先史・古代」リニューアルオープン

2019年3月19日(火)

愛知学院大学 歯学部 歯科資料展示室(楠元キャンパス 歯学薬学図書館情報センター1階)

形から見る 生き物の成長と発育

2018年4月3日～2019年3月29日の開館日(火・金)

MUSEO ACADEMIAE 第 20 号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 2018 年 6 月 14 日
発行者 大学博物館等協議会
編集 東京藝術大学大学美術館 050-5525-2435
〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8